

# やよい図書館TOPICS

館長が紹介する「印象に残った一文」とは？

フレーズ  
&  
センテンス

「読者は勝手にわたしの抽斗（ひきだし）を開けてくれたらいい。

また鍵をかけておくほどのものが、わたしの抽斗に入っているものでもない。」

神奈川県立近代美術館、世田谷美術館で館長を経験した著者の、美術館の仕事や日常の風景に、正に抽斗をあけていくように出会える1冊です。読書家でもある著者が読んだ本についても度々触れられており、そこから新たな抽斗に手を伸ばしてみるのも面白そうです。私は中でも『クローディアの秘密』と「一冊の本との巡り合わせ」という題で書かれた話が好きです。

『鍵のない館長の抽斗』 酒井忠康／著 求龍堂

（青山）

「誰か×誰か」「誰か×何か」の組み合わせが面白い！

河野裕子×永田和宏 『たとへば君 四十年の恋歌』 文藝春秋

この本には河野裕子と永田和宏夫妻の相間歌380首とエッセイが収められています。相間歌とは恋人同士の間で詠みかわされた歌のことで、2人が出会ったばかりの頃の歌に始まり、河野氏が乳がんを患って亡くなるまで、約40年に渡って詠み交わされた歌が載せられています。私が特に印象的だったのは、妻の歌集を読んだ永田氏が「お前はこんなにさびしかったのか」と言ったというくだりです。日頃何でも話し合っている夫婦でも分かち合えない想い、それを表現し伝えることができる短歌の凄さを感じました。（丸山）

Cinema  
library

原作本から入って良し、映画から入っても良し。

第22回 風が強く吹いている

★原作「風が強く吹いている」著者：三浦しをん

★映画「風が強く吹いている」監督：大森寿美男 主演：小出恵介、林遣都

新年が明けて様々なスポーツの大会が行われていますね！ 今回は、毎年寒いお正月に熱い闘いを繰り広げる「箱根駅伝」をテーマにした『風が強く吹いている』を紹介します。

大学に入学するけれど、住む場所のない蔵原走。高校時代インターハイに出た脚力を活かして万引きをしたところ、清瀬という大学の先輩につかります。住む場所がないならと紹介されたのは清瀬の住む竹青荘。ただの古いアパートにみえた竹青荘は、大学陸上部の寮。蔵原以外の住民たちもそのことを知らず驚く中、清瀬は「住民たちで箱根駅伝出場」を目標に掲げます。箱根駅伝を知らない人でも楽しめる映画です。なぜなら、箱根駅伝を目指す竹青荘のメンバーも箱根駅伝の事を知らないから。彼らも、箱根駅伝とはどうやって出場するのかを走りながら知っています。原作も個性派ぞろいですが、映画でも、ソフトバンクCMのお兄ちゃん役ダンテ・カーヴァーや、映画「タッチ」に主演した斎藤兄弟など、個性的な俳優たちが走ります。

次回は「西遊記～はじまりのはじまり～」です。お楽しみに！（大塚）



## 読書の窓

次回の読書の窓は  
3月号です。

その月ならではのテーマを特集。全てやよい図書館で借りられます。

### 1月「石」

新年1回目のテーマは「石」。1月4日に願掛けをして石に触れると、願いが叶うのだそうです。そんな素敵なものであやかり、いろいろな「石」の本を集めてみました。

『鉱石俱楽部』

長野まゆみ／著 文藝春秋

鉱物について学ぶ不思議な「夜間学級」、異世界を周る砂糖菓子職人の旅…。様々な石をモチーフとした、幻想的な短編集です。美しい写真と共に綴られる詩的な文章が、鉱物の魅力を一層引き立てています。

2つの異なる説明書きが各鉱物に付いているのですが、そのうち正解は1つだけ。どちらが本当の解説か、是非とも読んで確かめください。（新井）



『ストーンヘンジ 巨石文明の謎を解く』

ロビン・ヒース／著 創元社

ストーンヘンジはイギリスを代表する遺跡であり、世界遺産にも登録されている観光名所でもあります。しかし、この巨大な石群をだれが、何のために建設したのか、ほとんど何も分かっていません。本書はこれまでに行われてきた様々な調査研究を紹介し、ストーンヘンジの謎に迫る画期的な書です。図版も多数収録されており、入門書としても最適です。（丸山）

『ひとりで探せる川原や海辺のきれいな石の図鑑』

柴山元彦／著 創元社

ルビー、サファイア、ガーネット…これらは宝石店で買うものだと思っていませんか？ 実は、日本の川原や海辺でもこれらの天然石を見つけることができます。この本には石の写真に加え、見つかりやすい場所や必要な道具も紹介されています。そこらへんに転がっている石ころが宝物になる。そんな素敵な体験を、あなたも味わってみませんか？（丸山）

・『サファイア』

湊かなえ／著 角川春樹事務所

・『墓石の伝説』

逢坂 剛／著 每日新聞社

### 2月「カレー」

1968年の2月12日は、日本初のレトルトカレーとなった「ポンカレー」が発売された日です。それにちなんで、今月はカレーにまつわる本をご紹介します！

『カレーライスの誕生』

小菅桂子／著 講談社

日本の食卓でも馴染み深い料理ですが、本場インドのカレーライスとはどこか違う日本のカレー。発祥の地インドから、いったいどのようにして日本にたどり着き、現在のカレーの形となったのか。カレーの歴史を学べるだけでなく、カレーの原料となる香辛料やインド、イギリスのカレー事情の紹介などもあり、カレーの豆知識がたっぷりの1冊です。（竹原）

『つながるカレー』

コミュニケーションを「味わう」場所をつくる』

加藤文俊／著 フィルムアート社

あるまちでカレーをつくり、そこに住む人々に無料でふるまい、一緒にカレーを食べるという一風変わったプロジェクト「カレーキャラバン」の様子が描かれています。コミュニケーションの本質や、そこから生まれた想像以上の貴い時間が見て取れ、自分も一緒にカレーの鍋を囲みたくなります。（本田）

『昨夜のカレー、明日のパン』

木皿泉／著 河出書房新社

大切な人が死んでしまっても、日々は続いてゆく。その続いてゆく日常を、さらっと、でも慈しむようにすくい上げて、言葉にした小説です。晩ごはんに食べたカレーの香りや、焼き立てのパンを抱えて歩く帰り道など、普段は気にも留めないような日々の一瞬が、なんだか大切に思えてくる、そんな1冊。

（丸山）

・『インド通』

大谷幸三／著 白泉社

・『ぼくんちカレーライス』

つちだのぶこ／作 佼成出版社